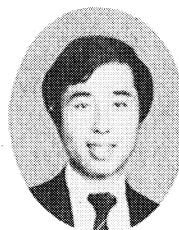


# 梨の花



馬目行雄

すのうちにみずからをみがき高めてきたにちがいない。そういう彼の姿を見て、私は身のひきしまるような思いをしたことがいく度かあった。それは自分の生活をぶりかえさせられるということだった。人は誰でも情熱を持つて生きる。しかしひとつ的情熱をしか生きられない。その持てるたつたひとつ的情熱を、教師という道の中に見い出したはず自分が、性急な効果を期待してつき進んでは押し返されることの続くながで、次第に事なきれ主義的な生活の中に流れこんでいきそつになるとき、身近に見れる彼の姿が、私にそうした毎日を検証させる力となるということだ。辛い自覚だったが、むち打たれる思いだった。

対するこまやかな心遣いさえ感じられてすがすがしさと同時に、おどろきにも似た思いをいたいたが一年という短かいつき合いの中で、それらのものがどこから生まれてきたのかを私は教えられた。それは部活動にかける情熱からだつたが、むち打たれる思いだった。

卒業前の送別会がひらかれたとき、Tは全員を前に出して輪にならせた。そして「先生も入って下さい」というのでその輪の中に入ると、全員に両腕を交差させて、それぞれの両脇の人の手をにぎらせた。それは部員に、心の輪を伝えようとしての発想だったが、私は、彼の情熱を全員に分け与えようとしているように思えた。三年間一つのこととに打ちこんできた。そのかけがえのないたつた一つの情熱を一、二年生一人一人に伝えようとしているように思えた。そして私にも。

今、私はこの情熱を、父を失くした私のクラスの生徒に伝えたいくと思う。同じような境遇の中で育った先輩が、どのような情熱の中で、三年間をすごし、みずから未来を切り開いていったかを。

「吹奏楽部の部長のTです。今度私たちの部の顧問をして下さるそうです。が、どうぞよろしくお願ひします。」正直い生徒の来訪をうけた。それはなん短かい言葉だったが、その中には部長のTだった。

本校に赴任して間もなく、吹奏楽部の副顧問に任命された私は、一人の折目正しい生徒の来訪をうけた。それは毎日の中でも彼は知らず知ら

心を一つにした演奏



(県立勿来工業高等学校教諭)

のこれまでの教員生活を振りかえつてみると、ときどき何か空漠としたものを感じる。」とおっしゃったことがあつたが、その先輩にこういう思いをいたが、その先輩にこういう思いをいたが、その先輩にこういう思いをいたが、最後までなしとげにくため、私は情熱を忘れず、生徒とともに生きることによつて生徒から学ぶ心を失わずに生きていきたいと思う。

真っ白な梨の花が、低い山なみを越えて続いている。その中腹の一軒の農家、その庭先に立つて、私はこの四月入学したばかりの生徒の父親の野辺の送りを見送った。そして遺影をだいだ彼の姿が、梨畑をぬうような山道をたどつて林の中に消えていったとき、ふつと私の頭の中に一人の卒業生の顔がうかんだ。

「吹奏楽部の部長のTです。今度私たちの部の顧問をして下さるそうです。が、どうぞよろしくお願ひします。」

が、どうぞよろしくお願ひします。そ

んな短かい言葉だったが、その中には

目上の人に対する礼儀と新任の教師に